

No.182

2018.
3.31

岐阜の博物館

編集兼発行：岐阜県博物館協会
〒501-3941
関市小屋名（岐阜県博物館内）
TEL：0575-28-3111
FAX：0575-28-3110

岐阜県博物館協会と個人会員

個人会員 齊藤 基生

一昨年創立50周年を迎えた岐阜県博物館協会（以下、岐博協と略す）の歴史は、『岐阜県博物館協会50周年記念誌』（以下、「記念誌」と略す）に詳しくまとめられている。活動の詳細はそちらに譲るとして、岐博協には他の都道府県協会では類例を見ない、「個人会員」という制度がある。

この制度が生まれた背景には、「記念誌」の中で土山公仁が触れているように、岐博協創設に向けた動きが官主導ではなく、民の力が大きかったことにある。県内には個人のコレクションを核とする施設がいくつもあり、名和正男、郷浩、吉田幸平ら岐博協草創期を主導した人達は、積極的にこうした中小の民間施設に入会を促した。西尾円によれば、設立時公立館と私立館はほぼ半々で、当初から個人会員の区分もあった。そして、それぞれの会費負担額に差を付け、参加し易くしていた。

こうして民間主体で動き始めた岐博協がその後どのように変わっていったか、事務局が置かれた場所の変遷から土山が分析している。

会員数が少なかった頃は個人の頑張りでも事務局の仕事も対応できたが、組織が大きくなるにつれ難しくなる。画期となったのは岐阜県博物館の開館であり、これを機にこれまで民間に置かれていた事務局が県博に移される。これにより徐々に岐博協の体質が変わっていったのは時代の流れであり、やむを得ない。

さて、個人的な岐博協との関わりについては「記念誌」の拙文に書いている通りで、そもそも会員館園の一職員であったが、退職時に一旦縁が切れる。数年の空白後に紆余曲折を経て、岐博協ならではの「個人会員」制度により復帰することになる。以来、個人会員として様々な恩恵を受けてきた。

大きな楽しみの一つが、岐博協の会員になることで、自動的に東海三県や五県の会に参加する機

会が得られる点である。かつて一職員として参加していた頃に出会った他県の博物館関係者と再会し、旧交を温めると同時に新たな出会いも生まれた。

この東海三県や五県も海老沢立志が述べているように、時代とともに活動内容が変わってくる。かつては初日の総会をさておき、宿泊が伴う情報交換会で現場担当者が本音の話を交わしてきた。ところが官民挙げて対費用効果の見直し、冗費削減の流れの中でこうした会議の宿泊費は真っ先に削られる。その結果、腹を割った話ができる機会は徐々に姿を消してゆく。一方、個人会員の旅費は元々自腹であり、仕事としてではなく、純粋に博物館が好きでこうした会に参加してきた。

ところで、「記念誌」巻末の会員館園一覧に依れば国公立館園55、私立館園58、個人会員9名で、全会員に占める個人会員の割合は7.4%である。これが多いか少ないか。

個人および個人運営の館園には、おそらく定年はないであろう。それに対し公立館や法人などが運営する館園では、遅かれ早かれ定年が来る。こうした館園の職員が在職中に身につけた博物館活動のノウハウや人脈が定年とともに途切れてしまうのは、組織にとっても個人にとってもあまりにもったいない。

幸い岐博協には個人会員制度がある。こうした定年後の方々に積極的に個人会員になってもらい、岐阜県の枠にとらわれず第二・第三の博物館人生を送ってほしい。

博物館には新しさと同様、古さも必要である。経験値の蓄積と老害は紙一重かもしれないが、個人会員として目指すは岐博協の語り部である。

（文中敬称略。また、誌面の都合上、いちいち引用箇所を明示しないが、すべて各氏の「記念誌」掲載論文による。）

協賛：公益財団法人
田口福寿会



十六銀行

OKB 大垣共立銀行

第65回全国博物館大会に参加して

期 日：平成29年11月29日（水）、
30日（木）、12月1日（金）
会 場：大分県大分市高砂町 iichiko 総合文化
センター、大分県立美術館

平成29年度の全国大会は、「今、博物館に求められていること～持続可能な社会における役割～」をテーマに開催され、博物館、美術館、科学館、歴史資料館等の関係者約400人が参加した。1日目に（公財）大分県芸術文化スポーツ振興財団 佐藤禎一理事長のよる基調講演「持続可能な社会に向けた博物館の役割」と博物館が社会貢献するための在り方等を議論する全国博物館フォーラムが行われた。フォーラムでは、半田昌之 日本博物館協会専務理事の司会の下、文部科学省生涯学習政策局や文化庁文化財部の職員からは、ICOM（国際博物館会議）京都大会や東京オリンピックの開催を契機に博物館がアピールできるチャンスであり、そのためにも学芸員の資質向上への取り組みが欠かせない等の説明があった。また、館・園等の運営には、観光や経済の視点が重要であり、文化財の保存や情報発信に関する研修に力を入れていくということであった。2日目は「博物館における人材育成～学校教育との連携を例に～」と題するシンポジウムが行われ、続けてテーマを「芸術文化による観光振興・地域づくり」、「求められる新たな学芸員像」、「文化財の防災及び災害復旧対策」とする3分科会が行われた。最終日には、大分県内の文化施設などの見学があり、「大分・豊後野コース」、「別府・宇佐コース」に分かれての視察が行われた。2018年は、東京都の上野にある東京文化会館で11月28日から30日の期間で開催される予定である。

（岐阜県博物館 加藤 信男）



第42回東海三県博物館協会研究交流会

期 日：平成29年11月7日（火）
会 場：名古屋市博物館

名古屋市博物館にて「第42回東海三県博物館協会研究交流会・平成29年度愛知県博物館等職員研修会」が開催され、87名の参加があった。主催者挨拶と趣旨説明の後に、本会のテーマ「無形文化財を博物館で「みせる」」に基づいた4つの講演があった。

まず基調講演として神野善治先生（武蔵野美術大学教授）をお招きし、「見えない世界をいかに見せるか」という演題で御講演いただいた。学芸員が「モノ」（計測可能な形態などの情報）から「コト」（資料の使用歴などの情報）を読み取り、互いを関連付けながら展示することの重要性について、事例を交えつつお話しいただいた。「コト」情報を充実させるためには、資料収集時の聞き取り調査はもちろんのこと、一見同じ形態でも使用歴は必ずしも同じでないことから、同種の資料を複数調査・収集していくことも大切であるという。

続いて事例報告として3名の発表があった。鈴木雅氏（名古屋市博物館学芸員）からは、祭礼の現況を映像や写真などで来館者へ紹介しつつ近世資料の紹介へと誘導する展示手法について報告された。鈴木氏自ら撮影・編集した山車まつりの映像も上映され、記録撮影の手法についても参考になる報告であった。

小栗幸江氏（美濃歌舞伎博物館相生座）の報告では、実際に使われている芝居小屋の中へ入って地歌舞伎の空間を体感したり小道具の制作に参加することで、来館者が伝承の生きた現場に触れることのできる体感型の展示方法が紹介された。無形文化の継承について来館者が考える契機になると思われる。

杉本竜氏（桑名市博物館館長）と久保田恵友氏（同市商工観光課学芸員）からは、展示対象である「まつり」を取り巻く環境に着眼した報告がなされた。学芸員はしばしば資料や来館者だけでなく、観光や文化財行政、地域住民などの調整力が求められる。無形文化遺産ブームが加速する昨今、展示を進めながら浮き彫りになった現場の課題に、学芸員がどう向き合っていくべきか考えさせられた。

今回紹介された事例は、いずれも報告者が資料（対象）やそれを取り巻く環境に対し真摯に向き合ってきたからこそ成り立つのだと考えられ、大変示唆的であった。

（岐阜市歴史博物館 松井 今日子）

専門部会報告

①もの部会

「もの部会」は、美術・歴史・民俗・考古・自然史などの様々な分野から9名が集まっています。「現場」で、作品・資料の収集や管理、館の保存環境の整備などを担当（苦勞？）されてきたばかりでなく、被災地のレスキュー活動に尽力された方もいらっしゃいました。そんな私たちの話題は、資料の整理、管理台帳の在り方、減災のための展示や保管方法、虫害やカビ対策 etc・・・分野が異なるメンバーで対話が深まると、当たり前になってきたことの「違い」に驚き、刺激を受ける連続です。特に、日々の業務が「非常時」の備えにも繋がるというところに改めて気づかされました。

以上の議論をもとに、もの部会では社会的な共通課題といえる博物館資料の保存と活用について、まずは（1）日常的な保存・活用に関する調査研究、（2）成果の発信・共有、（3）非常時のミュージアムレスキュー体制づくりを中心とした活動を考えています。

そこで、日博協の研究協議会「博物館と防災」で全国的な動きや各地の連携した取組を学びながら関係者との交流を深め、関連する情報の収集と共有を行ってきました。

3月6日には三輪嘉六氏をお招きして、公開講演会を開催しました。文化財学の視点、九州国立博物館ほかのご経験などをもとに「『もの』を護る」「市民との共生」「信頼」「やさしさ」等をキーワードに、博物館が果たす役割を考える機会となりました。

（美濃加茂市民ミュージアム 藤村 俊）



②ひと部会

10月20日、ひと部会は第一回会議を開催しました。まず、ひと部会は旧体制の研修部会を引き継ぐため、これまでの実績とすでに寄せられている情報、提案を確認しました。そして、会員館の知識や技術の向上を目指す外部講師を招いた講義型研修会と加盟館の情報共有や交流を視野に入れたワールドカフェのような参加型研修会を1年の活動に盛り込む方向となりました。今年度は、SNSを含む広報活動とミュージアムグッズをテーマとする研修会の開催を決定しました。

第93回会員研修会は、徳川美術館 管理部マネージャーの鈴木裕之氏と学芸部マネージャーの加藤啓子氏を講師にお迎えして「広報戦略を考える ―自館の強みを見直す 徳川美術館の事例を中心に―」を開催しました（1月31日 岐阜県現代陶芸美術館）。

刀剣ブームや業界初コミックマーケットへの参加など、興味深い企画の広報活動をご紹介いただき、また SNS の活用方法の具体的事例とリスクヘマネジメントを含め、お話いただきました。徳川美術館の組織的な取り組みがもたらす成果報告にも刺激を受けて、後半は活発な意見交換会となりました。炎上への対応、SNS 閲覧数と来場者数増加の関係、有料広告の効果の有無、費用対効果への疑問、固定客獲得のための取組などが話題となり、各館の問題意識に照らした情報共有ができました。

第94回会員研修会は『ミュゼ』編集長の山下治子氏をお迎えし、ミュージアムグッズに関する講演と、加盟館がオリジナルのグッズを持ち寄る参加型の研修を開催しました（3月9日 美濃加茂市民ミュージアム）。今後はこと・もの部会と連携しながら、地域ブロックからの要望も反映できるような活動展開を考えています。加盟館にとって有意義な研修会の企画、交流の場の提供を目指し、更には岐阜県外の学会や機関との情報交換、外部への発信にも努めていきたいです。

（美濃加茂市民ミュージアム 和歌 由花）

地域ブロック報告

①岐阜地区

本会は、岐阜地区にある県博協加盟館の情報交流と会員の研修及び親睦を深めることを目的として、平成29年10月16日に発足しました。9月に加盟館25館へ部会の発足を呼びかけ、初回には7名が集い、会の趣旨確認や情報交流、今後の進め方についての意見交換を行いました。第2回(12/11)は、午前には岐阜大学須山知香さんの案内で金華山の自然を観察学習し、午後は鶯飼ミュージアムにて活動計画を練りながら郷土食文化の研究会(芋煮会)を開催、ミュージアム利用者や一般参加者の方々との交流を行いました。また、事業課長 河合昌美さんに展示解説をしていただきました。第3回(1/29)は、笠松町歴史未来館を会場にして14人が集いました。学術専門員 高木敏彦さんの講話で笠松の歴史を学ぶとともに、日頃は見ることの出来ない収蔵庫の貴重な収蔵品や、作業エリアを見学させていただきました。懇談会では、笠松の歴史・文化を偲ばせる茶菓も功を奏して岐阜県の博物館活動の歴史話等に花が咲き、地域の方々との親睦を深めました。

今後も、「博物館の楽しさ&岐阜の良さ」を、より多くの方々と共感できるような活動を続けていきたいと思ひます。

(岐阜大学教育学部 須山 知香・
笠松町歴史未来館 高木 敏彦)



②西濃地区

岐阜県博物館協会では、今年度より組織の改編があり、地域ごとにブロック部会ができました。西濃地区では、OKBギャラリーおおがき

の古川館長が呼びかけ人となり、11月25日にOKB Sky Lounge OGAKIで最初の会合を開きました。西濃地区には16館の加盟館がありますが、この日にイベントが計画されていたり、1人しかいなくて出席できない館があったりして、非加盟館を含め7人の出席者となりました。オブザーバーにみのかも文化の森の可児館長を迎え、地域ブロックの組織のあり方や他地域ブロックの活動状況などの議題を話し合いました。夜の部では、古川館長から、協会のむかしばなしなどを聞き、今後のブロック部会のあり方について考える有益な機会となりました。来年度は、多くの方に参加していただける部会を開催し、公開講座などの一般の方々も協会事業に関われる企画を考えていきたいと思ひます。

(タルイピアセンター 原田 義久)



③中濃地区

中濃ブロック部会では、個人会員も含めて広く参加者を受け入れた隔月の情報交流会を開催し、各館の施設概要、展示情報の提供、各館の課題、中濃ブロック部会としての取り組みについて協議・検討している。会員館の現状を相互理解するため、施設等の見学会と合わせて情報交流会を実施している。また、部会独自の企画として、会員館が主催する展示や講座などと連携を企画している。今年度は、平成30年1月26日に美濃加茂市民ミュージアム文化の森で開催された講座、「[「回想法」を学ぶ]」を部会の公開講座として共催できた。

平成30年度は、中濃ブロック部会における課題の共有と課題解消に向けた取り組み、一般の方にも参加していただけるような部会としての企画も検討している。また会員館の企画展と部会としての連携企画も計画している。

(可児市教育委員会 長沼 毅)

第148回 公開講座

「回想法」を学ぶ

失われゆくモノから地域コミュニティを考える

期 日：平成30年1月26日（金）

会 場：みのかも文化の森

参加者：30人

講 師：山内利秋（九州保健福祉大学）

④東濃地区

東濃ブロック部会では、年明けの1月25日
ようやく第1回目の集会を開催し、個人会員
やオブザーバーを含めて21名の方にご出席い
ただきました。

集会では世話人に砂田普司（瑞浪市陶磁資料
館）、副世話人に春日美海さん（土岐市美濃陶
磁歴史館）が選出され、今後の部会のあり方や
事業方針について協議を行いました。

今後の部会のあり方については、現場の学芸員
がつながり、自由な活動展開が望まれるとの意
見が出された一方、活動のためのルールづくり
も必要との意見も出されました。

また東濃地区には、主に公立の14施設が加
盟する東濃地区博物館等連絡協議会という既存
の組織があることから、その組織との役割分担
等も課題として挙げられました。

事業方針については、時間的な制約もあるこ
とから、今年度の事業は未実施とし、新年度に
なってから新たに事業計画を協議することとし
ました。

（瑞浪市陶磁資料館 砂田 普司）

⑥飛騨地区

平成29年5月の通常総会にて、新たに県下
5地域にブロック部会を設けることが決定しま
した。飛騨地域においては、創立50周年事業
の参加館において相互の館の顔合わせ・つな
がり初めて持てたこともあり、その継続の場と
いう意味でも地域ブロックの存在意義はあるも
のと考えました。そのため、8月に加盟館・個
人会員に呼びかけ、10月19日に飛騨高山ま
ちの博物館を会場に、発足にむけた意見交換会
を実施しました。

加盟館のうち、約1/3の10館のスタッフが
参加し、現在館が抱える悩み等の意見交換を通
じ、共通の課題点や問題意識の確認を行いました。
しかしながら、単に集まるだけの部会であ
れば、これまで同様、意味の薄いものとなるた
め、問題解決を持った活動をするべきと等々の
意見もあり、今年度中の発足の合意形成には至
りませんでした。特定の館や行政だけがリード
するのではなく、小さな館の思いも反映できる
県博協ブロック部会とすることが、今後の課題
です。

（飛騨地域ブロック部会発足呼びかけ人一同）

博物館等の現場では民俗資料の活用事例とし
て知られる「回想法」について、九州保健福祉
大学の山内准教授を招いて講演会が行われまし
た。会場には、医療福祉の現場に携わる方の参
加も目立ちました。

まず、今後高齢者、認知症者が急速に増加す
る日本の厳しい現実を示され、住み慣れた地域
でより良く暮らし続けることのできる社会実現
のため、生涯学習機関が果たす役割の期待の高
さをお話しされました。

先進事例として英国、北名古屋市や氷見市の
事例、そして山内氏が宮崎で取り組まれている
具体的な活動を紹介されました。

最後に、今後博物館が回想法を取り組むにあ
たり、医療福祉分野との相互理解を図る必要性
と、博物館の持つ豊富な資料と教育普及メ
ニューを活かし、地域社会の中で住民とともに
取り組んでいく具体的な活動展開をお話いただ
きました。

「博物館は、人々がそこで「よく生きること」
に寄与すべき」という意識を持って、取り組み
を進めたいと思いました。

（郡上市教育委員会 岩井 彩乃）





図書紹介

会員のお薦め図書

岐阜県美術館 芝 涼香

「公共性」

齋藤 純一

発行 岩波書店、2000年

「美術館は敷居が高い」「子どもを連れて行きづらい」

岐阜県美術館に勤めて3年、何度もこうした声を聞いた。美術館は誰でも入れるはずなのに、なぜこう思われるのか。美術館は誰のためにあるのだろうか。

著者は「公共性」という言葉について、以下のように解説している。

- ① 国家に関係する公的な (official) もの
- ② 特定の誰かにではなく、すべての人びとに関係する共通のもの (common)
- ③ 誰に対しても開かれている (open) という意味

公的であるか否かは別としても、美術館（および博物館）はおおよそ上記の「公共性」を有しているように思える。共通の財産である作品・資料などを調査研究し、広く一般に開かれる展覧会などの事業を行っているからだ。ではなぜ「敷居が高い」のか。

共同体との比較が最も興味を引く。共同体が宗教や道徳、文化的価値など「共同体の統合にとって本質的とされる価値を成員が共有することを求める」のに対し、公共性は「人びとのいさかか価値が互いに異なるものである」ことを条件とする。また、共同体では「情念（愛国心・同胞愛・愛社精神等々）」が、公共性では「人びとの間にある事柄、人びとの間に生起する出来事への関心」が統合のメディアとなると述べられている。

展覧会では学芸員が調査研究してその成果や主張を表現する。また館内では「静かにしていなければならない」という暗黙の”ルール”が存在している。この状況は異なる価値が共存するというよりも、ある価値を来館者に共有することを求めていると言えないか。つまり美術館は展示室内において、公共性を有しているというよりも、実は一つの共同体になり「がち」と言えるのではないだろうか。容易に「誰にでも開かれた」がただのお題目になる可能性に満ち溢れているのである。

本書が触れるアーレントの主張から半世紀以上が経った今、SNSなどの個人による発信力は高まっているが、他者への関心が薄れ、多様な意見が交わり合う場は成立しがたい。そうした場こそ、今こそ求められているのではないか。岐阜県美術館では館長日比野克彦を筆頭に様々な取り組みを行ってきた。まだまだ発展途上だが、本書での気付きを活かしていきたい。

博物館協会 インフォメーション

活動を始めました 「こと部会・研究会」

2017年度から岐阜県博物館協会の組織が変わり、「こと部会」が誕生しました。「こと部会」は機関紙の発行や協会ホームページの更新などの広報活動のほか、調査研究を行う専門部会です。さらに2016年の岐阜県博物館協会50周年事業から生まれた「のこす部会」の発展として、岐阜県の博物館や協会の活動などについて研究をしていく「研究会」が新たに誕生。「研究会」は調査研究活動を広めていくという外へ発信する活動も行うため、「こと部会」の中の一部門として位置づけ、「こと部会・研究会」と呼ぶことにしました。協会50周年の「のこす部会」では協会の歴史を、機関紙や会議資料、協会の刊行物などから紐解きました。しかし協会活動についての記録資料が十分でないなど、まだまだ岐阜県の博物館協会の活動や協会加盟館について追及すべきテーマがたくさんあると感じました。そこで「こと部会・研究会」では、岐阜県の各博物館の歴史や県内の博物館が共有する様々な課題を解明すること、そしてその蓄積につながるような調査研究を行う場となり応援することを目指しています。

第1回目「こと部会・研究会」は2018年1月17日にみのかも文化の森で開催、「こと部会・研究会」の位置づけや今後の進め方、研究内容などについて相談をしました。そしてメンバーがそれぞれ調査していること、岐阜県生まれの棚橋源太郎とゆかりのあった人物のこと、岐阜県教育会の郷土館の活動に関すること、岐阜県の郷土史家の調査と当時の歴史編纂についてなどの報告をしました。今後は、協会加盟館の取り組み状況など、実際の活動についてもテーマにし、メンバーを増やしていきたいです。

動き始めたばかりの会ですが、他の部会とも協力しあいながら、協会の発展、各博物館の活動のプラスにつながる「こと部会・研究会」となっていきたいと考えています。

(美濃加茂市民ミュージアム 西尾 円)

編集後記

協会機関紙 No.182号は専門部会及び地域ブロックの活動報告を中心に編集しました。この機関紙が、会員相互のつながりを強め、各館の活性化への一助になればと思います。次号も引き続き会員の声を記事にしていきます。皆様からのご意見やご感想をお待ちしております。